

『キリストは生きている (Christus Vivit)』 教皇フランシスコ —カトリック教育の源泉：「出会い」の体験知から「霊性」へ—

片山はるひ

(上智大学)

1. はじめに

先の見えないコロナ禍が続く中、希望することの難しい状況が世界的に広がっています。そして死の影が日常生活に覆い被さる中で、いつにも増して、人間の生と死の意味が問われる時代であると感じます。人間が「どこから来て、どこへ行くのか」という問いは、広義での「霊性」の次元の問いです。21世紀は「霊性の時代となるだろう」というのは、作家でフランスの文化相を務めたアンドレ・マルローの予言でしたが、まさに今「霊性」の時代のただ中で私たちは生きています。「霊性 (spirituality)」はもともとキリスト教の用語です。カトリック教会の中で育まれてきた、神と人間の絆についての深い洞察は、古びるどころかこれからの混迷の時代にこそ、その真価を発揮するように思われてなりません。

2. 「生きる意味」と「霊性」

上智大学の神学部で10年前くらいから「倫理と霊性」という授業を開講しています。神学部の授業ですが、全学に開かれていて毎年ほぼ半数が他学科の学生です。この授業の前半では、倫理の根本問題である「生きることに意味があるのか」についてV.フランクルの思想を『夜と霧』を用いて学び、後半では霊性、特に祈りについて学び、聖堂で実践を行います。この授業を開講するに至った理由は、「生きる意味」について多くの学生が真剣に悩んでいること、そして祈りを具体的に体験し教える授業がないことからでした。

日本語で霊性と訳される Spirituality は、ラテン語の Spiritus から来ていて、その第一の意味は「息」です。その語源は、旧約聖書のヘブライ語ルーアッハで、息・息吹・風を意味する具体的にダイナミックなイメージの言葉です。従って、神の霊は、風や息のように目には見えないけれども、人をその内側から生かし、動かし、変革するもので、その神 (の霊) との関わり方、その神 (の霊) に生かされた生き方がキリスト教における霊性です。

3. 「神について知ること」から「神を知ること」へ：体験知の根本的必要性

授業の祈りの実践を行う中で、私が確信するようになったのは、沈黙の中で神と出会い、そして自分と向き合う時間の大切さです。そして洗礼の有無にかかわらず若者達がこの祈りの時間から実に多くを学びとることに毎年驚嘆しています。

それは、言い換えれば「神の愛」を知識として「頭」で学ぶだけではなく、体験を通して「心」で理解することの根本的な重要性を示しています。世界青年大会 (World Youth Day)、巡礼、黙想会、そしてグループエマオでの23年間の経験など、青年司牧に関わった経験からも同じ確信を持っています。この体験知は、もちろんボランティア、典礼、行事などを通して得られるものですが、直接的に神の愛を知ること、その体験を深め、自分の霊性を創りあげることがで

きます。そのためには、教員自身がこの体験知を持っていることも必要となります。今カトリック校で働く熱意ある教員達からも、自分を根底で支えているのがこの体験知であると聴くことが少なくありません。

4. 「神の物語」と「私の物語」

この直接知、体験知があれば、イエスと出会って、その生き方を変えられた弟子達のように、聖書で語られる神の物語、イエスの物語が私の物語と接点を持つようになります。逆に言えば、父なる神、イエス・キリストとの内なる関係がない時に、聖書の様々な教えやたとえ話は単なる道徳、つまらない掟の羅列 となってしまいます。

人間は、本質的に関係存在ですが、その最も根源的な関係が「神」との関係であるならば、霊性は、どの人間にとっても本質的な問題です。そして、霊性の次元で「神は生きている」こと、「神が自分を愛している」ことを実感することが、「生きる意味」の問いに共に向き合い、応えを探し求めることにつながってゆくのではないのでしょうか。

5. おわりに

現在、従来の知識偏重に対抗して、人間の在り方を重視する「being」教育という用語が生まれ、それがひいてはリーダーシップがとれ、企画や独創に富む人間を育て上げるのだと、企業のほうからも注目を集めているようです。

2018年に行われた若者について世界代表司教会議（シノドス）をうけて、教皇フランシスコは、使徒的勧告『キリストは生きている』を發布しました。この中で、教皇は、「霊的な養成を教養の修得から切り離さないように」と、そして「頭にある知識と、心、そして手による行為を一つに結ぶ能力を育むことが大切」だと語りかけます。この一つに結ばれた能力こそが「体験知」となり、一人一人の霊性を築いてゆくのです。

世界の急激な変化の中で、ともすれば絶望の淵に足をとられそうな混沌の中で、若者達は切実な問いを胸に生き、無意識であっても自分の「being」の基盤となる価値観を探しています。自分の軸となる価値観がなければ、アイデンティティを創り上げ、社会の中で自分の役割を果たしてゆくことも困難です。今、カトリック教育の源泉にある霊性、その価値観に基づいた教育を、現代のニーズに応じて新しく提示する仕方が求められているように思います。

源泉から湧き出る「生きた水」が、今の時代の根源的な渇きを癒すことを、私たち自身が確信し、その水に生かされて共に歩むことができるなら、それがこれからの宗教教育を共に構築してゆく原動力となるのではないのでしょうか。